

— 第5回 —

アルツハイマー病らしさを知る

今月のポイント

- 病態失認：健忘や見当識障害を認識できない
- 社会脳：社会で生きる知恵
- 作話、取り繕い、言い訳は自己防衛
- もの盗られ妄想で責任転嫁
- 自己防衛機序としてのBPSS



山口晴保

群馬大学医学部保健学科
教授・医師

専門はアルツハイマー病の神経病理学やリハビリテーション医学。認知症の進行を防ぐ脳活性化リハビリテーションにも取り組む。著書に「認知症の正しい理解と包括的医療・ケアのポイント（第2版）」（協同医書出版）など。

これまで、認知症の最大の原因疾患であるアルツハイマー病（アルツハイマー型認知症）の発症メカニズム（第2回）や、早期から出現する空間認知障害（第3回）や記憶障害（第4回・前回）について記してきました。

今回は、アルツハイマー病らしさがテーマです。

「らしさ」とは、アルツハイマー病の人が発する独特な雰囲気です。これがわかるようになる、会って1分もお話しないうちに、その人がアルツハイマー病であろうと予測できるようになります。アルツハイマー病の人は、身体機能がしつかりして一見健康そうで、笑顔で愛想良く、失敗を取り繕い、作話や妄想がみられ、その時その時を上手に生きています。どうしてこのような態度をとるのか、その背景を探ります。

記憶障害と取り繕い

私は認知症の方を診察するとき、まず年齢をたずねます。その時、「オレ、76だっけ?」と伴侶のほうを振り向けば、認

知症が始まっています。これは「振り向き徴候」と名づけられた症状です。何をたずねても、伴侶のほうを振り向いて確認するのは、自分の答え（記憶）に自信がなくなっているからです。病気が進行すると、確認せずに、いい加減に答えたり、平然と若い年齢を答えます。このよう

な答えの背景には、強い健忘や見当識障害に加えて、その状態を認識できていないこと（病態失認）や自分の回答をチェックする判断力の衰えがあります。次に「何か困ることはありませんか?」とたずねると、多くの方が「何も困ることはない」と答えます。家族は困っているのに、本人は「困っていない」と主張するのが特徴です。

「毎日どのようにして過ごしていますか?」とたずねると、具体的なことは答えず、「大したことはしていない」「家の手伝いくらいだ」などと、漠然とした答えが返ってきます。

「テレビはどんな番組を見ますか」といった具体的な質問をすると、介護者から聴取した事実とは異なる返答があり、その内容から作話であるとわかります。

病態失認的態度

脳には、自分の言動を監視する「監督人」（脳の前頭前野のこと）が住んでいて、自分の行動が社会のルールに合っているかどうか監視しています。そしてこのルールは、その人の過去の生活歴、つまり記憶に基づいて形成されます。これが「社会脳」といわれる認知機能の発達です。

たとえば、皆さんの中で「私はあなたより頭が良い」と相手に言う人はいますか? 言わないでしょうか? これまでの生活体験で、そういう人がいないことや相手よりも下手に出たほうが、物事がうまくいくことを知っているからです。相手が何か言ったとき、「そんなこと知っているよ」と言った途端に、相手の心は離れ、逆に、知っていても「そうなんだ」と感じると、相手は友好的になる。こんな体験から社会適応能力を身につけていくことが、「社会脳」の発達です。

アルツハイマー病になると、この社会脳が壊れるので、介護してもらっている伴侶のことを「この人は私よりも頭が悪

い」などと言ひ出します。また、自分の発言を監視することができなくなるので、あり得ない言い訳や作話をするのです。また、しまい忘れから、しばしばもの盗られ妄想を発症します。この場合も、なくしたのは自分だという自己嫌悪感から逃れるため、他人を犯人にして自己防衛をはかるのです。

社会で生きるための自己防衛

このような、言い訳、取り繕い、作話、妄想といったアルツハイマー病の特徴的な症状は、社会生活を送るための自己防衛機序として説明できます。アルツハイマー病の人が示すさまざまな徴候の裏には、認知機能が消えていくことへの漠然とした不安や苦悩が隠れています。失われていく認知機能の中で、精一杯、社会との関係を保とうと自己保存本能を働かせている姿が、アルツハイマー病らしさの根源です。

ですから、言い訳や作話に対して反論することは、傷口に塩を塗るような行為であることを見極めなくてはなりません。*機序（医学用語）……しくみ、メカニズム

図 アルツハイマー病の特徴
言い訳・作話・妄想の背景にある自己防衛のしくみ

